別　紙　2

審査の結果の要旨

論文提出者氏名　　内　野　　儀

本審査委員会は、平成14年6月29日土曜日、博士号申請論文『メロドラマからパフォーマンスへ――20世紀アメリカ演劇論』について、本研究科８号館419教室において公開の審査会を行った。

本論文の問題点として、予備審査の段階から、構成の「ゆるさ」を指摘する意見があがっていた。「20世紀アメリカ演劇論」という副題が示しているように、通史的な問題意識を内包した論文であるにもかかわらず、全15章のうち12章は、ベトナム戦争以降の時代の革新的演劇家およびパフォーマンス・アーティストの意義を、時代の流れの中で列記するという構成になっており、各章の焦点も、作品論、作家論、状況論、時代論、文化論を揺れ動いていて、論文全体のテーゼが明快には結論づけられていないのではないかという意見である。

審査会の質疑応答のなかで徐々に確認されていったことは、筆者の選んだテーマがまさにそのような書き方を要求しているということであった。「メロドラマからパフォーマンスへ」という題が意味しているのは、1960年代後半に決定的になったアメリカ演劇の軸の移動、およびその後永続する自己変革的状況であって、現場における多種多様な試みから、このような大きな見取り図をできうる限り正確に組み上げていくには、個々の舞台に対するミクロ視座と、それぞれの舞台をそれぞれにあらしめてきた政治社会的な力を見据えるマクロな視座とを往復する複眼的なパースペクティブが必要である。対象を静的に統一された記述の平面に取り込むことは学術研究の基本ではあるが、本論文の豊かさは、むしろ猥雑な状況へ演劇研究を開いた点に求められる。すなわち、複雑化する20世紀アメリカ文化、その歴史的歩みの諸局面である時代状況、それぞれの時代を特徴づける社会的ムーブメントとそれと共振し合うかたちでの演劇人の生き様――それら、作品を同心円的に取り巻くコンテクストの輪を見据えながら、常に新たなジャンルを生み出しつづけるアメリカ演劇の有機的全体像を描き出したことが本論文の特筆すべき成果であると、本審査委員会の全メンバーが認識するに至った。

もう一点、本審査委員会が考慮しなくてはならなかったのは、本論文が、ほぼ12年間にわたる筆者の論考をまとめたものだという事実である。筆者の研究人生の過程で、そのつど産み落とされた成果を合体させたものを、博士論文にふさわしいと認定するか否か。

この点に関して、本委員会は一般論を展開する立場にはなく、あくまでも提出された論文自体の価値を吟味することを任務とした。そしてこの論文が、いまだ統一的に記述されたことのない問題系に関して、本家アメリカにおいても類書を見ないほどの広がりと深みをもった議論を展開していることを確認した。その貢献は、以下の二点にまとめられる。

(1) 本論文は、いわゆる“近代劇”としてあったアメリカ演劇の前提が、筆者の言う「1968年型演劇」の登場によって根底的な批判にさらされて以降、四半世紀の間に上演の現場で繰り出されてきた数々の問題意識を体系づけた上で、テクストと身体、表現者の自己と社会の交差する劇場空間の様態を跡づけている。リヴィング・シ

別紙 2 (その2)

アター、サム・シェパード、トニー・クシュナー、ロバート・ウィルソン、ピナ・バウシュ、カレン・フィンリー、ローリー・アンダーソン等々を経てクィア・パフォーマンスに至る試みを一つの視座に収めつつ、それを一つの文明論の水準で読み通させるという仕事は画期的なものである。オニールやミラーによる古典的テクストを扱うときも、演劇をその文化的コンテクストとの関わりにおいて論じるという姿勢が一貫して保持されており、結果的に、本論文は「20世紀アメリカ演劇論」と呼ぶにふさわしい大きさをもった有機的論考たりえている。

(2) 本論文が体現しているのは、従来の文学研究的なやり方でテクストに密着するのとはアプローチの異なる、現場性を重視する表象文化論的演劇研究の良心に従った研究活動であり、ここには、そうでなければ得られであろう種類の見識が満ちている。また、劇場と教育研究の場とを縫うようにして生き、足繁くアメリカに出かけて現在の先鋭的な舞台表現のありようを追い続けながら、一貫して向かい続けた思考の足跡が記されている。

審査の過程で、系譜づけにやや強引な箇所がみられる点、当然扱って欲しかった人物が扱われていない点等が指摘されたが、点描的な方法によって通史を語るさいに、その種の不満が残るのは避けられず、むしろ、これまで別個のもととして捉えられてきた諸事象間に関連の糸を張り巡らせた点を積極的に評価すべきだという意見が大勢を占めた。

一人の委員は、この論文で筆者は「三人分の仕事を一度にやった」と評したが、その言葉は、デザインされたと言うよりは、むしろ熟成の過程において舞台批評と学術研究と文明論的ビジョンとが融合した、本論文の性格を物語っている。ともあれ、現在進行形の文化事象を十分な広がりと奥行きをもって語りつつ、これまで戯曲のテクスト分析を中心に演劇を研究してきた者が持ちにくかった巨視的な視座を、ソシオ＝ポリティカルな力学を持ち込むことで可能にした本論文に対し、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。